

国

語

(前期日程・100点)

2月25日(日) 13:30~15:00 (90分)

注 意 事 項

- 1 監督者の指示があるまで、この問題冊子および別の答案冊子を開いてはいけません。
- 2 この問題冊子は11ページあります。別に答案冊子(答案用紙2枚)があります。
- 3 試験中に問題冊子および答案冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁、汚れ等に気付いた場合は、静かに手を挙げて監督者に知らせてください。
- 4 監督者の指示に従って、2枚の答案用紙のそれぞれの所定の欄に氏名(1箇所)と受験番号(2箇所)を記入してください。
- 5 試験開始の合図の後に、答案冊子の折り目を丁寧に切り離してください。切り離し損なった人は、静かに手を挙げて監督者に知らせてください。
- 6 解答は答案用紙の所定の欄に記入してください。所定の欄以外に書いた解答は無効です。
- 7 答案用紙の縦線より右の部分には、氏名と受験番号のほかは記入してはいけません。下寄りに引かれた横線より下の部分には、なにも書いてはいけません。
- 8 問題冊子の余白は下書き用として使ってもかまいません。
- 9 試験終了時刻まで退室してはいけません。
- 10 試験終了後は、答案用紙2枚だけを監督者の指示に従って提出してください。
- 11 答案用紙以外は、すべて持ち帰ってください。

国

語

(第1問・第2問)

第1問

次の文章を読んで、後の問1～問7に答えよ。なお、解答に字数指定のある場合は、句読点なども含むものとする。

(配点 50点)

著作権の関係により掲載できません。

著作権の関係により掲載できません。

著作権の関係により掲載できません。

(注一) 戊辰戦争……一八六八年(慶応四年/明治元年)から翌年にかけて新政府軍と旧幕府軍の間で繰り広げられた内

戦。

(注二) 佐幕派……幕末の動乱期に幕府の権限維持を主張して討幕派に対抗した一派の総称。

(注三) 適塾……緒方洪庵が大坂(＝大阪)で開いた蘭学の私塾。

(注四) 明六社……一八七三年(明治六年)に森有礼が福沢、加藤らと結成した日本最初の学術団体。

問1 二重傍線部 a ～ f について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

問2 傍線部 A「それだけではありません。」とあるが、「それ」の内容の説明となるように、本文中の語句を活用して

空欄

X

と空欄

Y

を埋めよ。

X

にもかかわらず、大学は

Y

こと。

問3 傍線部 B「同様の力学」とあるが、ここで「同様」とされる二者についてまとめて述べている一文がこの傍線部以降にある。

その最初の十字を答えよ。

試験問題は次のページに続く。

第2問

次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。なお、解答に字数指定のある場合は、句読点なども含むものとする。

(配点 50点)

著作権の関係により掲載できません。

著作権の関係により掲載できません。

(加藤幸子「鳥の巣屋敷」による)

問1 この話はどうのように展開しているか。登場人物たち(少女・祖母・母親)の動向に注目して、話の順に次のア～オを並び替えてよ。

- ア 母親は結婚して屋敷を出たが、やがて夫を亡くした。
- イ 祖母が亡くなった後、母親が別の男を連れてきた。
- ウ 母親は少女を連れて祖母の住む屋敷に戻った。
- エ 祖母は存命中の祖父から屋敷を贈られた。
- オ 祖母は自分の娘をひとりで育てた。

問2 波線部Ⅰ「少女は漠然とではあったが、イラストレーターになろうと考えた。」と波線部Ⅱ「専門学校に行つてどうしてもイラストレーターになろう、とそのとき少女は決心した。」について、少女の考えはどのように異なるのか。状況を踏まえた説明となるように、以下の文の空欄を自分の言葉で補つて完成させよ。

Ⅰでは)

()からイラストレーターになりたい、と考えたが、

Ⅱでは)

()からイラストレーターになりたい、と決心した。

問3 傍線部A「おじさま、あの木の上にある古い鳥の巣を取ってきてちょうだい。」について、次の(1)・(2)に答えよ。

(1) この言葉とそれに続く出来事は、以前の少女の「鳥の巣」に対するある行動と対照的なものとして読むことができる。該当する箇所を本文中から三十字程度で抜き出せ。

(2) 傍線部から少女の「おじさま」に対するどのような思惑が読み取れるか。これまでの経緯を踏まえて、最も適切なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 母親の知らないうちに、少女は鳥の巣を媒介としておじさまとの関係の修復をひそかに試みた。

イ 父親的な立場になると予想されるおじさまに少女は甘えを見せ、娘としてふるまってみせた。

ウ 今後の伐採に備えた巣の避難という行為を通じて、少女はおじさまの考えを改めさせようとした。

エ おじさまが樹木と鳥たちの居場所を奪ったことへの一種の仕返しとして、少女はわなを仕掛けた。

オ 面倒な仕事をあえて頼んで痛手を負わせることで、少女はおじさまの自分への本心を知ろうとした。

問4 傍線部B「少女の後ろで、祖父と祖母が笑っていた。」について、次の(1)・(2)に答えよ。

(1) 既に亡くなっているはずの祖父母が、ここには登場している。祖父または祖母についてこれと同じような表現上の特徴を持つ一文を本文中から五十字程度で抜き出し、その最初と最後の各五字を答えよ。

(2) 彼らが「少女の後ろで」「笑っていた」ことには、どのような意味があると考えられるか、説明せよ。

問5 この文章全体の説明として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 祖母や少女の屋敷に対する愛着の具体的な理由は明示されないものの、彼女たちと共存する鳥たちの巢のありかたに、安全な居場所というものが形象化され、自然と人間の理想的な関係とその崩壊を描く一種の寓話となっている。

イ 祖母・母親・少女という三代にわたる女系家族の歴史が、多様な表現技巧を駆使して描かれ、男性不在の家庭であるため、の不自由や生活の荒廃をもとめせず生きるしたたかさが、野生の鳥たちの生息に重ねて表現されている。

ウ 祖母も母親もいったん屋敷を出て仕事についていたり、過去の思い出よりも今の生活を優先させて家を建て直したりする展開が詳細に描かれるなど、全体として現実的な側面が強調されており、リアリズムの短編として成立している。

エ 祖母や少女が屋敷に愛着を持つのにに対し、母親は男と共に別に世帯を持ったり屋敷を壊す男を連れてきたりするという鮮明な対照性があり、さらに人間と鳥たちの世界も敵対的に描かれ、綿密に構成された短編となっている。

オ 祖母の生活苦を助けるべく祖父が残してくれた屋敷だったが、祖母と少女が大事にしたいと思う鳥たちとの共生もよそ目には廃屋同然の生活で、その幻想が打ち砕かれるのは必然だった、という皮肉な結末を物語は内包している。